

王妃エレアノールと愛の思想

石 井 美 樹 子

なぜ歴史小説という手法を選んだのか

西ヨーロッパ世界は、十三世紀末から十五世紀末にかけて古典の文芸を復興させ、ひとびとを中世のしつこくから解放し、人間賛歌をたからかに歌いあげました。後世のひとびとは、この時代を近代へのあけぼのとして讃えてやみません。けれども、これよりずっとまえに、このおなじ世界が、すでに人間性復興の時代を経験していたことに注目するひとは少ないようです。ヨーロッパ史の流れを変え、その地図をいつきに塗りかえたというんで、中世史に占めるこの時代、十二世紀の重要性とドラマ性は、後世のルネッサンスの比ではとうていありません。十字軍による大量の民族移動と十字軍国家の形成、「カノッサの屈辱」や「トーマス・ベケットの殉教」に象徴される法王と国王の激烈な争い、中央集権国家の形成、聖ベルナルドや少しのちのフランシスコ会に代表される宗教と修道院の革新運動、大学の誕生と発展、ロマネス美術からゴシック美術への変移、水力昇降機の開発による産業の機械化とそれに伴うめざましい経済の伸長、金融・交通網の発達など、この時代のダイナミックな社会の動きが国家間の境界線を引き直させ、ひとの流動をうながし、人間の生活を変え、新しい思想と哲学をうみだしました。十字

軍の波にのって地中海沿岸地域に旅をしたひとびとは、古典古代の文明を西ヨーロッパにもたらしめます。古典古代のおおらかな人間賛歌に心をゆさぶられたフランスの神学者アベラールなどの人文主義者たちは堂々と人間宣言をしています。マリア崇敬の高まりとともに、「呪われた」女性たちにも、一筋の光がみえはじめます。新しい女性観の台頭とともに、ついに男女の愛を歌いあげる芸術家たちが登場します。十二世紀は、女性賛美の歌をうたいあげる南仏のトゥルバドゥールやドイツのミンネジンガー、そして、女性に愛をささげ愛に殉教する騎士たちを描くロマンスの作家たちにもおおいなる舞台を提供しました。

わたしは、この時代を研究し、描くにあたってこれまでのどの著作とも違う、歴史小説という道をえらびました。王妃エレアノール（一一二二—一二〇四年）の生涯と彼女の生きた十二世紀をしらべてゆくうちに、エレアノールや彼女をとりまく人物たちが、自分たちの行為の意味や心のうちをわたしに語りかけてくるようになりました。それを文字に記すには、どうしても想像という領域にふみこんでゆかなければならなかったのです。わたしたちに残された歴史書や年代記のたぐいは、そのほとんどが、隠す必要のない行為を正当化する思想や、文字に記しても恥じることをない記録とかであります。しかも、それらは、男性、しかも教会人であり、職業柄、特に女性に触れることはおろか、興味を持つことさえもゆるさず、したがって性欲と特に女性に嫌悪を示すひとびとによって書かれました。いうまでもなく、十四、五世紀になって市民層が経済的力を得るまで、文書にしてなにかを記するという行為は、教会にはば独占され、文字に限らず、教会だけしか後世に残りうる文学文化を創造することができませんでした。したがって、文書の作者は、たいていは聖職者か修道士であって、いわば時代のエリート、最高の知識人、教養人でありました。かれらは、保守的な思想の持ち主でしたから、かれらによって記録された文書は、すべ

て正道をはずれぬ立派なものばかりでした。女性にたいしても、権力の確立に有効な理論をもちだしては、その権力に有利な思想やモラルで女性たちを評価し、そのモラルに合致していればよしとし、合致していなければ、自分たちのモラルを盾に女性を糾弾したりその背徳性をあばいたりして、女性の存在を否定したのです。多くの場合、かれらは、女性たちを、「妻」、「母」、そして「男の性の快楽のための道具」としてのみ語ります。しかし、現実世界の女たちは、つねにこの三つの機能におしこまれ、それに満足していたのでしょうか。もつすこし時代がくだり、十三、四世紀になれば、女性たちのなまみの声もかすかではありますが、聞こえてくるようになりますが、わたしが語ろうとする、いまから八百年ほどまえの十二世紀については、文書から女性の姿は見えず、彼女たちの情熱や魂について、なにもわからないのです。歴史と文学のはざままで生きてきたわたくしがなすべきことは、この時代のひとびとの描いた人生や歴史の軌跡の事実をたどりながらも、わたしの心にかれらが訴えてくる声やかれらの情熱の動きを語ることにあるのではないかと思うようになりました。そういうわけで、無謀とは知りつつ、歴史小説という分野に挑んでみたのです。

歴史という巨大なメカニズムは、ときおり皮肉な働きをするものです。最も力なく最も弱い人間が、歴史を動かす時代を造る役割をになうこともあります。わたしが語ろうとする十二世紀も、じつはひとりの女性に動かされていました。中世が、女性蔑視の時代であったことを否定するひとはいいないでしょう。いつの世も、価値の大きく揺れ動く時代にあつては、ひとは、おのれの価値観、人生観、生きる指針を選びとってゆかなければなりません。この時代は、またひとが、生きるこの意味を激しく問われた時代でもありました。女性の権利はおろか、人間の最低の権利すら確立されていなかった時代に、国際政治を動かし、文化を推進し、時代の主人公として、激しくも

熱く激烈に生きた女性がいたのです。これは、わたくしにとっては、おおきな驚きでした。

十二世紀という時代は、ひとりの女性の手になぎられていたといっても過言ではありません。時代は、まさに、「かよわくも愚かな」と伝統的に蔑視されてきた女性のひとりを中心に動いていました。これが歴史の大逆説でなく、なんてありませんか。このひとりの女性こそ、エレアノールです。フランス王ルイ七世の妃となり、のちにイングリッド王ヘンリー二世の妃となり、ヨーロッパ史を彩った十字軍の英雄、リチャード獅子心王、そして欠地王ジョンの母となった人物です。王妃エレアノールは、女性の人格がほとんど認められていない時代に生を受けました。彼女は、十四歳のときに、広さと豊かさにおいてフランス王国領の数倍にも相当する領土を相続します。女性にも父や夫の家系と社会的地位を継ぎ、財産を受け継ぐ相続権が認められていたからです。けれども、時代の慣習と政治の世界の厳しさは女の相続人が、実際には領土を統治することは許しません。莫大な婚資を手にしたエレアノールも、ときをおかずして花嫁となり、夫に財産と地位と身柄をゆだねる運命にありました。その婚資にふさわしく、花婿はフランスの皇太子、未来のフランス王でした。結婚とともに、祖父伝来の領土を治める力と彼女の人格権は夫の手ににぎられます。熱狂的な民衆の歓呼の声に迎えられ、少女は夫の国にはいります。この世が女性におくりうる最高の名誉と幸福とを、彼女は手にします。しかし、なみの女性がしあわせと感ずる人生をおくるには、エレアノールは賢すぎ、そして美しすぎました。彼女が相続した領土は豊かすぎ、広大すぎました。エレアノールは、領土もろとも人格までも夫に動かされるといふ時代通念に激しく抵抗します。彼女は、自分の領土をみずから統治することを望んだのです。自己の人格をみずからの力で形成し、みずから選んだ運命を歩くことを欲しました。まもなくエレアノールの夫ルイは、フランス王ルイ七世になります。彼女の自立への闘いは、フランスの

運命をまきこまずにはおきません。エレアノールの闘いの相手は一国の王とその王国になります。けれども、彼女はひるみません。彼女は闘います、激しく熱く、そして、ときにはしなやかに。闘いは、夢みがちな南仏うまれの明るい少女を力強くたくましい黄金の大鷲^{わし}に育てあげてゆきます。だが、大鷲がはばたくには、フランス一国ではせますぎたようです。大鷲は広い世界を求めて空たかく飛翔します。海のかなたの豊かな島に舞い降りた大鷲は、海峡をはさんでフランスとイングランドのふたつの王国にその二つの翼をひろげます。フランス王妃の王冠をぬいだエレアノールは、未来のイングランド王ヘンリーを第二の夫に選びます。彼女の胎からいでたイングランドの子鷲たちの名を年代記の作者たちは、こう記しています。「若いヘンリー王」、リチャード獅子心王、欠地王ジョン、マリー・ド・シャンパーニュ……時はめくるめく流れ、大鷲の愛した二人の夫たちはこの世を去ってゆきます。子鷲たちも、母に負けず激しく生きますが、しかし母とはちがつて時代を足ばやに駆けぬけてゆきます。トーマス・ベケット、ジョン・オブ・ソールズベリー、聖ベルナルド、アベラールとエロイーズ、騎士の華ウイリアム・マーシャル、十字軍の英雄レーモン・ド・ポワチエなど、エレアノールの人生を彩ったこの時代のおもな主人公たちもエレアノールに別れを告げ、世を去ってゆきます。だが、母なる大鷲は生き続けます。けっして王妃としての王冠をぬぐことなく、彼女はヨーロッパの運命を背負って最後のひと息まで闘い続けます。フォントブロー修道院でしずかに目を閉じたとき、八十二年の星霜が彼女のうえにふりそそいでいました。

いつの世も、偉大なる統治者はやすむことなくつぎまわりますが、エレアノールも例外ではありませんでした。エレアノールは精力的に旅をしました。ロンドン、パリ、ローマ、コンスタンティノープル、アンティオキア、イエルサレム、ナヴァール王国……いたるところにエレアノールの足跡があります。十字軍の遠征の帰途、捕虜にな

つたりチャード獅子心王を救うべく、莫大な身代金をたずさえて、真冬の大陸を横断してマインツに赴いたエレアノールは、七十二歳でした。半世紀にわたるフランス王室とイングランド王室の確執に終止符を打つために、孫娘ブランカの手をひきピレネー山脈を越え、フランス皇太子の手にブランカを花嫁として引き渡したとき、エレアノールは、七十八歳になっていました。できそこないの息子ジョンがフランス王フィリップと大陸の所領をめぐって戦いにはいったとき、エレアノールは、八十歳でした。それでも、病の身をおして居住地のポワチエを脱出、ミルボー城にたてこもり、フランス軍に対抗しました。

彼女は激動の時代をその流れとともに生きました。政治と愛と冒険に殉じることが、彼女のよろこびであり、生きる目的でした。この世の愛、それは彼女の人生の主調音です。トゥルバドールの第一人者、ギヨーム九世を祖父とした娘にふさわしく、エレアノールは、芸術を愛し、男性を愛し、人生を愛しました。激しくも詩情ゆたかな彼女の感性は、華麗なる愛の宮廷をイングランドとポワチエに出現させます。この愛の宮廷から、中世の倫理観を根底からゆるがすほどの過激な思想がうまれるのです。エレアノールは、恋愛が「無償」の情熱であり、まことの恋愛は姦通なりと、たからかに宣言したのですから。かくのごとき王妃エレアノールは、愛の詩人たちに強い牽引力をもっていました。当代随一のトゥルバドール、ベルナル・ド・ヴァンタドールは王妃をこう賛美しています。

私があのかたを目にすると、私の気持ちはたかぶり、
目と顔に喜びがみなぎる。

私の心の内は、すぐ私の顔にあらわれ、

私は、嵐に舞う木の葉のようにうちふるえる。

あの方をあまり深く愛するあまり、

大の男の私は、こどものように無力。

エレアノールへの熱い想いを赤裸々に告白するドイツのある詩人の声に耳をかたむけてみましょう。

ライン川から大海まで

たとえ、全世界が私のものだとしても、

そのすべてを、ひとに与えてもいい。

もし、私が、イングランドの王妃を

この胸に抱くことができれば。

エレアノール亡きあと、フランスとイングランドは、三百年にもおよぶ長い確執の時代にはいりました。これは、エレアノールが政略結婚で結ばれたルイ七世を捨て、十一歳したの、イングランドの若き獅子ヘンリーを第二の夫に選んだことに端を発するといわれています。僧侶のような夫ルイとの結婚はしあわせとはいえず、エレアノールは新しい生き方を求めたのです。エレアノールは、女であるがゆえの呪縛から自由になりたいと願いました。当時

の社会倫理や道德観がよしとする女の生きかたにそむきました。それにあてはめられることを拒みました。彼女はおのれの好むことを行い、彼女の理性と情熱がさし示す道を進みました。そのために高い代償をはらわなければならないこともありましたが。当時の年代記者やゴシップ筋はこぞって、おそろしげに、あるいは、にくにくしげにエレアノールをこう呼んでいます。「あばずれ」、「売女」、「姦婦」、「怪物」、「魔女」、「悪魔の子」と。嫉妬、傲慢、色欲・多情、激情、女の悪徳をあらわすありとあらゆる言葉で、彼女は形容されています。十字軍遠征で捕虜となり、莫大な身代金で買取られたリチャード王と欠地王ジョンの、ふたりの王の治世を生きたイギリス人は、この子驚たちの母エレアノールを災いとみなしました。数百年後、シェイクスピアの時代のひとびとの心からさえ、災いとしてのエレアノールのイメージはぬぐいさられてはいません。戯曲『ジョン王』のなかで、シェイクスピアは、エレアノールを「流血の闘争にむかわしめた災厄の女神」と描写しています。しかし、これは、男の論理をたてまえたとした歴史観から見たエレアノール像でしょう。彼女の魂の領域にまでたちいたって、この時代をみつめなおしたときに、エレアノールは新しい装いでわれわれのまえに立ちあらわれてきます。二国の王に仕え、九人の子を世におくり、フランスとイングランドの二国にまたがる広大な領土の維持に心血をそそぎ、夫とこどもたちの幸福を願い、イングランドとフランスのみならず、ヨーロッパ世界の平和に心をくだし、華麗なる宮廷文化の華をひらかせ、たえず自分とはなんであるかをみつめながら運命に挑戦し続け、八十二年という長い年月を生きぬいた果敢な女性の生涯を知るとき、むしろひとは人間の偉大さに心うたれるのではないのでしょうか。そして、生きることのすばらしさをあらためて思い知るのではないのでしょうか。

エレアノールがヨーロッパ史に残した長い長い軌跡をたどりながら、わたしは、いつしか彼女の魂の領域にまで

踏み込んでいました。あるときにはたゆとう大河のごとく悠然と流れ、あるときには怒濤のごとく時の流れに反抗し、与えられた生を燃焼しつくして世を去ったエレアノール、彼女の存在に、わたしは強い衝撃を受けました。そうして、今の世に生きるわたし自身の生き方を激しく問い直していました。歴史上の人物に出会うということは、まさにこのようなことをいうのであろうとおもいが胸のなかにありました。

つぎには、紙面の許すかぎり、エレアノールについて語りながら、彼女が生きた時代を考えていきたいと思います。

エレアノールといえば、アリエノール・ダキテーヌの名で思いだされるかたも多いでしょう。エレアノールは、いろいろな書物のなかでつぎのように紹介されています。「トゥルバドゥールの第一人者、南フランスのアキテーヌ公爵ギヨーム九世の孫娘、ロマンスの作家クレチアン・ド・トロワのパトロンとして名高いマリィ・ド・シャンパーニュの母」。有名なプチ・ロベール百貨事典には、「ヘンリーと別れたのちは、ボワチエの宮廷にひきこもり、ベルナル・ド・ヴァンタドールをはじめとする芸術家やトゥルバドゥールに囲まれて暮らす」と記されています。芸術は、エレアノールの人生で重要な部分を占めてはいましたが、それがすべてではありませんでした。しかし、トゥルバドゥールの第一人者を祖父とし、その祖父の宮廷で大きくなったということは、エレアノールの人格形成に計り知れない影響をおよぼし、ドウルバドゥールの思想がそののちの彼女の生きかたや人生の指針となったことはまちがいありません。祖父を語ることなくして、エレアノールの本質に触れることはできないでしょう。わたくしも、エレアノールの祖父を語ることから、エレアノール像へちかづいてみたいとおもいます。

年代記作者は、ギヨーム九世のことをこう記しています。「世にまれなる雅なひとで、女を騙す手管に最もたけ

た男のひとり、男女の道には鷹揚、「あらゆる破廉恥とあらゆる神聖なるものの敵」、「悪徳のなかにはいつくばるもの」と。これらの言葉が証明しているように、ギヨームは少年のころから女性には異常な情熱を燃やしました。相手は、貴婦人であろうと、娼婦であろうと、はたまた農婦であろうとかまいませんでした。食欲も女あさりにとらず旺盛で、一回に並の男の二人分ぐらいはたいらげたということです。世俗のありとあらゆる歓楽が、ギヨームの生きる目的となりました。誰はばかることなく欲望をむきだしにして生きた男、それがギヨームでした。放蕩ざんまいの生活ではありましたが、公人としてのギヨームは決斷力と勇氣とに満ち、彼を領主に戴いたアキテーヌは、半世紀近くものあいだ、かつてないほどの繁栄を享受したのです。ギヨームは、「イエルサレムでこそ死にたい」と思うほどの深い信仰があるわけではなかったのですが、当時の多くの領主の例にもれず、十字軍の遠征隊をひきいて聖地へむかいました。のちに「一一〇一年の民衆十字軍」と呼ばれることになるこの遠征隊の結末は悲惨なものでした。総勢二十万といわれた十字軍兵士のうち、聖地にたどりついたのは、わずか一パーセントにみたなかつたのです。ギヨームの遠征隊も、ほぼ壊滅しました。十字軍遠征は当時の若者たちの最大のロマンであり、夢であり、冒険でした。しかし、十字軍の夢破れて帰国したギヨームは、十字軍にたいして、もはやいかなる幻想もいだいてはいませんでした。ただ、アンティオキア滞在中に、ギヨームのなかにねむっていた詩作の才能がよびさまされたようで、帰国したギヨームは、詩作に専念し、のちに、南フランス一のトゥルバドゥールとまでたたえられますようになります。

トゥルバドゥールを祖父として

一一〇〇年ごろから十三世紀末にかけて、南フランスには、オック語の方言で抒情詩を書き、自作の詩を奏でる詩人兼音楽家が続々とあらわれました。トゥルバドゥール、つまり、吟遊詩人として知られているかれらの活動は、カタロニアからイタリアへ、さらに、ミンネジンガーのドイツを経て、ハンガリーへと広がり、この時代のヨーロッパ文化に少なからぬ影響を与えました。

トゥルバドゥールは、ひとびとが見つめることをこばんできた愛の概念を、白日のもとにひきだしました。それまでは、ロゴスにくらべて、エロスの愛は、はるかに劣ると考えられていましたが、かれらは、男と女のエロチックな〈愛〉を高らかにうたいあげて、エロスの愛をほとんど神秘的な信仰の高さにまでひきあげました。十五世紀になると、近代ヨーロッパの先駆けとして、ルネッサンスの波が全ヨーロッパをおそいますが、それよりも三世紀もまえに、この愛の奉仕者たちは、いっさいの衒いや羞恥心を捨てて、人間存在の最も根源的な世界を堂々と見つめたのです。

トゥルバドゥールの活動の早創期を飾った第一人者が、エレアノールの祖父アキテーヌのギヨーム九世でした。ギヨームは、徹底した現実主義者でした。彼にとって、女性を愛するということは、すなわち、肉の快楽を共にすることにほかなりませんでした。彼は、精神的な愛よりは、官能的で肉体的な愛の完成を追い求めたのです。

ギヨームの最も人気をくした詩のひとつに、若者の情事を赤裸々に描写したものがあります。

この若者は巡礼になりすまして、旅をしていました。オーヴェルニュのとある館で、アンとエレアノールと名の

る二人の姉妹に出会う。姉妹の夫たちが留守だとわかると、若者は口の不自由な者のふりをして、訳のわからぬことをモグモグ言いながら、ふたりに近づきます。姉と妹は、若者に食事をあたえ、彼が食事をしているあいだ、彼を観察します。それから、彼が本当に口をきけないことを、さらに確かめようと、彼を裸にして、獐犷な赤毛の猫を彼にたちむかわせます。猫は長いひげで彼をくすぐり、鋭い爪で彼の背中をひつかき、若者の背中中、何本ものみみずばれで真つ赤にふくれあがりました。それでも、若者は、泣き言ひとついわず、苦痛と屈辱に耐えます。これなら安心とばかり、姉妹は、熱い風呂を用意して、若者を寢室に招じ入れます。

それからの八日間というもの、若者は、姉妹を相手にベッドのなかで大奮闘し、輝かしい戦果をあげました。若者は、そのときの体験をほこらしげに語ります。

わたしが、何度うちこんだか、諸君におきかせしよう。

百と八十八回ですぞ。

そんなわけで、わたしの引き具の皮はめくれ、

装備はすんでのところで、破れるところだった。

それで得た災難は、挙げるときりがない。

それもこれも、船があまりに大きすぎたためなのです。

ギョーム流の猥雑で滑稽な詩は、イタリアのボッカチオの『デカメロン』に受けつがれてゆくことになります。

けれども、慎み深さを忘れた官能的で狂熱的な詩ばかりが、ギヨームの十八番ではありませんでした。優雅で、澄んだまことの恋愛詩も多く書いています。そのような詩には、トゥルバドゥールの芸術の核心が凝縮されています。つぎの春の歌には、近代ヨーロッパのあけぼのを告げているかのごとき心情がみられます。

新しい季節の心地よさに、

木々は葉をつけ、小鳥たちも、

それぞれが自分のラテン語で歌う、

新しい歌の調べに合わせて。

しかしながら、繊細で精神的な輝きを秘めてはいても、また紳士淑女の礼儀作法にのっとって語られてはいても、肉体的な欲望やエロスをけつして否定しないところに、トゥルバドゥールの恋愛詩の本質があるといつてよいでしょう。

ある朝のことをまだ憶えている、

わたしたちが戦いに終止符をうち、

あのひとが、かくも大きな贈りもの、

その愛とその指輪をくれた朝。

神よ、わたしを生き永らえさせたまえ、

あの人のマントの下に手を忍ばせる時まで。

このような愛の概念は、それまでの西ヨーロッパが理想とした愛の概念とは、まったく異なる性質のものでした。愛する女性との肉の交わりを求めてやまないトゥルバドゥールの愛の思想が、教会の教えとまっこうから対立するものであったことはいうまでもありません。しかし、新しい愛の理想をかかげた詩人たちは、女性を単なる欲望の対象とみなしていたわけではありません。愛に殉じる男たちは、愛する女性に愛を強要したりはしないのです。トゥルバドゥールたちは、へりくだった態度で、つつましく愛を懇願します。

もし、あの人が愛の贈りものを下さるなら

それを受け、心から感謝して、

口外することなく、あの人に仕え、

お気に召すに話し、振る舞うつもり。

男の愛を受け入れるか否かは、ひとえに女の意思にかかっているのです。女は、男の快樂のための道具ではないのです。トゥルバドゥールの愛の概念には、女性の人格をみとめる人類平等主義的な思想があります。トゥルバドゥールの恋愛詩に、宗教的な気高さを感じるのとは、そのためでしょう。かれらは、人間が生まれながらにして与え

られた運命的な欲望を正直にみとめて、それをすこしも恥じず、人間が官能的愛を本来もとめずにはおれない性質であることを認識したうえで、そこに我を没頭させ、そして、その我をこえて、さらに高度な理想めざして飛翔しようとするのです。この魂の気高さが、詩のまことの真髓になっています。程度の差や、ニュアンスの違いこそあれ、すべてのトゥルバドゥールは、この理想のうちに生き、この理想を表現しようとしていました。

このような新しい愛の概念をうたった恋愛詩が、無なる土壌から生まれたわけではありません。トゥルバドゥールの旋律の宗教的な調子が、ローマ教会の典礼歌や準典礼歌に深く係わっていることを後世のひとびとは発見しています。それに、遊歴詩人たちの奏でる歌謡や民謡などの世俗曲も、トゥルバドゥール誕生のための土壌を用意しました。ギヨームの場合は、東方遠征で接したムーア人やサラセン人たちの文化からもまた、大きな影響を受けています。

エレアノールは、この祖父と二度目の妻フィリップとのあいだにできた長子ウィリアムを父としました。ギヨームとフィリップのあいだには、その後五男一女が生まれますが、ギヨームの放蕩は、相も変わらず続き、とうとうある年、ギヨームは臣下のシャテルロー子爵夫人をかどわかって同棲を始めます。ダンジュルーズという名をもつこの夫人は、その名のとおり、若く美しく、欲望のおもむくままに生きる危険な女性でした。ギヨームの行為は、当然教会の怒りをかい、ギヨームは破門されます。人妻でありながら、愛人のもとに走ったダンジュルーズには、ギヨームと結婚できる望みはまったくありません。そこで、彼女は画策するのです。シャテルローに残してきた娘のアエノールとギヨームの長子ウィリアムを結婚させて、娘にアキテーヌ公爵夫人の地位を得させようとしています。彼女の策略は成功し、アエノールはウィリアムの花嫁としてアキテーヌにむかえられます。エレアノールは、ウィ

リアムとアエノールを父母とし、一二二三年に、この世に生を受けました。エレアノールとは、もうひとりのアエノールという意味です。

エレアノールは、かっぱつで明るく、利発な子で、健康と知性にめぐまれ、父方と母方のよい素質を受けついでようです。母のアエノールは、祖母のダンジュルーズとは違って、地味で控えめでした。その娘のエレアノールは、むしろ、祖父母の性質を受けついでよう、エレアノールの血のなかには、ギヨームの冒険心と情熱、そして、ダンジュルーズの美しさと勝ち気さと大胆さと、自由へのあこがれが、脈々とながれていました。トゥルバドゥールの第一人者ギヨームを祖父とし、ダンジュルーズを祖母とし、かれらの宮廷で育ったエレアノールがかれらの思想を実人生で実行したとしても、すこしも不思議ではありません。

アキテーヌ公爵家は、代々、ボワトゥー伯爵とガスコーニュ公爵とを兼ねていました。その領土は、北はロワール川から南はピレネー山脈のふもとまで、東西はオーヴェルニュの中央高原から大西洋まで、ギユイエンヌ、ポワトゥー、オーベルニュ、ペリゴール、アングレーム、リムーザン、トゥールーズと現在のフランスの半分ちかくにわたる広大な地域にまたがっていました。今のフランスのほぼ十九洲が、この地域にすっぽりと入ります。領土はロワール川の北部をおさえているノルマンディー公爵家より広く、はるかに肥沃。主君のフランス王の領土のほぼ三倍、地味はくらべものにならないほど恵み豊かで、ノルマン征服王が冠をいただくブリテン島より、はるかに作物に適した温和な気候の土地でした。この広大な地域に散らばる大小の諸侯たちが、アキテーヌ公爵に主従の誓いをたて、ピラミッド型の封建組織を形成していました。エレアノールの祖父ギヨーム九世は、自らを「アキテーヌ大帝国の公爵」とよんではばかりませんでした。

運命

エレアノールが十四歳のとき、父が、サンチャゴ・デ・コンンポステラへ巡礼中に急死し、エレアノールは若くして父の残した所領の主人となり、父の地位を引き継ぎます。父は、最後の息をひきとるまえに主君であるフランス王ルイ六世あてに遺言書をしたため、娘を彼女にふさわしい婿にめあわせてくれるようにとたのみ、娘とその所領をゆだねます。

カペー王朝の祖ユーグ・カペーが、シャルルマーニュ大帝の最後の生き残り、カロリング王朝のルイ五世を倒したのは、九八七年のことでした。そのときのフランスは、英独仏三国のなかで、王権の最も弱い国でした。臣下の大名のなかには、君主より広大な土地を所有し、より強力な軍隊をもつ者が少なくありませんでした。そのうえ、カペー王朝とカロリング王朝との王権争いは、まだ続いていました。

ネストリア辺境伯または、フランク人の公爵とよばれていたカペー家（カペー家最後の王はフランス革命で処刑されたルイ十六世、最後の王妃はマリー・アントワネット）は、カロリング王朝を倒して、フランス王の座を手に入れたものの、その勢力は、パリを中心とするイル・ド・フランスに限られており、事実上、フランスは大諸侯の分立する状態にありました。この状態は、十三世紀まで続きます。

カロリング王朝が、神の塗油によって王権を神授されたのとは対照的に、ユーグ・カペーは、同等の位の貴族たちに擁立されて王となったために、当初から、王家としての威厳と尊厳を欠いていました。

はじめの数世代は、王位を父から子へと譲り渡すのがせいっぱいで、王家としての権力を強めようとか、威厳を高めようとか、あるいは、領土を広げようとかの野心を抱く余裕はなく、父親が生きているあいだに、息子に王位を譲り、諸侯に臣従の礼をとらせ、世襲制を確立してゆくだけで勢いっぱいだった。

封建社会の領主は王に臣従の礼をとり、配下の諸侯たちは領主に臣従の礼をとりました。そして、その諸侯たちには、配下の騎士たちが臣従の誓いをたてました。このように、まるでクモの巣のように国のすみずみにまではりめぐらされた臣従の誓いにより、ピラミッド型の封建国家が形成されていました。力のある者と力のない者とは、誓いという約束事によって手を結び、義務を果たし、そして、自分の権利を守ったのです。

貴族たちに雍されて王になったとはいえ、サミュエルがダビデを塗油したという旧約聖書の記事にならって、教会から正式に王として聖別されたカペー王家でありましたから、代々の王には、配下の諸侯を制する権利があたえられていました。反乱や権力の乱用が生じた場合、軍隊を派遣して鎮圧し、国内を平定するのは、王家の義務でした。だが、カペー王朝の力は、のちの太陽といわれたルイ十四世の王朝とくらべると、微々たるものです。直接の支配権は、王の領地にかぎられ、ほかの領地にたいしては、反乱でもおきないかぎり、王権を発動することは、まづできませんでした。ルイ六世の時代になって、やっと、パリとオルレアンのあいだのモンレーリー要塞の直接支配権を手にいれましたが、そのとき、王は、「閉じこめられた牢獄から救いだされでもした」かのように狂喜したといわれています。

王領の貧弱さにくらべて、エレアノールが継いだ領土は、広大なものでした。しかも、力があり、名家ぞろいの大小の貴族たちが、アキテーヌ公に臣従の誓いをたて公爵家を支えていました。

アキテーヌの丘は、ぶどう畑でおおわれ、アキテーヌの空気には、一年中、甘いかおりが漂っている。山に野に、そして森に、あらゆる種類のくだものがふんだんに実り、森のみどりは色濃く、ゆたかな牧草地では、みごとに肥えた家畜が草を食んでおり、海岸線にめぐまれ、大西洋に面した港町は繁栄し、さまざまな国の船が出入りしていました。ボルドーは、はやくから塩とワインの輸出港として知られ、またスペインよりのベイジョンヌ港は、捕鯨船でにぎわっていました。肥沃な土地の領主にふさわしく、アキテーヌ公爵家は歴代のフランス王よりも贅沢な暮らしをしていました。

このフランス一豊かで広い領地を手に入れて、カペー王朝を名実ともにヨーロッパの名だたる王家にすることは、カペー王朝一五〇年の悲願でした。それが、ギヨーム十世の急死により、思いがけなくも達せられようとしているわけですから、ルイ六世がエレアノールをほかの男性にわたすわけはありません。そのへんのところは、エレアノールの父ギヨーム十世もしつかりと計算にいらしていました。アキテーヌの後継者の婿として未来のフランス王ほどふさわしい人物はいないと。その思惑どおり、ルイ六世は、ほかでもないわが子、フランスの皇太子をエレアノールの婿に選びます。

皇太子とエレアノールが結婚すれば、婚資として、アキテーヌ領がルイのふところに無償でころがりこんでくる、一滴の血も流さず、平和のうちに、しかも法的に正しく。おまけに皇太子ルイは、「世界の薔薇」と恋愛詩のなかで歌われているほどの若く美しい妃をむかえることになるのだ。皇太子が王となったあかつきには、神聖ローマ帝国皇帝に劣らぬ、富と権力と幸福を享受するであろう。父が息子にあたえる贈り物のなかで、これほど大きなものがあるか。

皇太子ルイは、ルイ六世の次男として生まれました。兄のフィリップは、活達で、まさに王になるべく生まれたようになりしく賢い少年でした。兄が、豪胆で強い騎士になるための教育を受けているあいだ、弟のルイは、僧侶となるべく修道院で育てられていました。ルイは口数が少なく、ちいさいときから、じつと思案したり読書に夢中になっているほうが多く、修道院での生活は、このような内気な彼の性格にぴったり合っていました。きびしい修業も戒律も、少しも苦にはなりません。神に献身する生き方こそ自分にあたえられた天命と信じていました。そして、精進にあけくれ静かで平和な日々をおくっていました。それが、ある日、何のまえぶれもなく、父王から宮廷によびもどされたのです。そして、父のあとを継いでフランス王になる運命になったことを告げられました。兄フィリップが落馬し、急死したのです。

南フランスのトゥルバドゥールの宮廷で育ったエレアノールと修道士のようなルイとの結婚がどのような結末をむかえるかは、陽の目を見るよりあきらかでした。ふたりのあいだには、王女が二人生まれますが、一一五二年に離婚します。ふたりの性格の違いが主な原因だったのですが、性格のまったく反対の組み合わせは、当時の政略結婚ではごくふつうのことでしたから、これは表向きの原因にはなりません。ふたりで赴いた第二回の十字軍遠征（一一四七―四九年）がまったくの失敗に終わったこと、結婚して十六年にもなるのにふたりが、男子の世継ぎに恵まれなかったことなども、離婚のおおやけの原因とされています。しかし、離婚（実際には、結婚の解消）を言いだし、ルイに離婚を迫ったのは、じつはエレアノールでした。当時、離婚できる場合は二つありました。当事者に、とくに妻のほうに姦通の罪が証明された場合と、夫と妻が「結婚禁止親等」にあると証明された場合でした。前者の場合、夫も妻とともに再婚できなくなります。エレアノールは、アキテーヌ家とカペー王朝の家系の詳

細に調べた結果、ルイとエレアノールが血族関係、しかも「結婚禁止親等」内にあることを発見し、それを盾に離婚をせまったのでした。

別れ

百年もまえにさかのぼる話なのですが、ルイの四世代まえの祖先、ロベール敬虔王（九七〇年ごろ—一〇三一年）は、エレアノールの五世代まえの祖先にあたりました。つまり、ルイとエレアノールは四親等と五親等のあいだがらにあつたのです。アキテーヌのギヨーム八世と結婚したロベール王の孫娘のヒルデガードが、エレアノールの曾祖母にあたります。

ローマの民法によると、父と娘は一親等にあります。兄と妹、祖父と孫娘は、二親等。叔父と姪は、三親等。いところ同士は、四親等のあいだがらにあり、「四親等」いないの血族間の結婚は禁じられていました。それいじょうに離れた血族間の結婚が、正当なものと判断されていました。教会法は、もともとローマ民法の数えかたに従っていました。八世紀前半に二度、ローマで開かれた宗教会議は、いところ同士の結婚を禁じているだけです。ところが、九世紀の前半ごろになりますと、結婚禁止親等の範囲が、四親等から七親等にひろげられ、数えかたも変わります。共通の祖先にたどりつくまで、一世代ずつさかのぼって数える方法が採用されます。この数えかたによりますと、娘と父は一親等、娘と祖父は、二親等、娘と曾祖父は三親等、とさかのぼって行って共通の祖先にたどりつくまで数えてゆきます。そして、当事者同志が七親等いないにあるばあいには、その結婚は近親相姦と認定されました。

それで、ルイとエレアノールのばあいのように、王の側近でさえ気づかなかったほど血が離れていた結婚でさえ、その正当性がうたがわれることになるわけです。これが近親相姦だとするならば、ヨーロッパの貴族階級全員が、その罪を犯していたということになります。

もうひとつの王冠

一一五二年、三月二十日、金曜日、オルレアン近くのボージャンシーにあるルイの城には、フランスの高位聖職者たちが、続々とつめかけてきました。サンスの大司教によって召集された宗教会議は、ルイとエレアノールをまえにして、ふたりの親族関係を確認し、ふたりの結婚が無効であることを宣言しました。二人の王女は、王の嫡出子と認定され、親権はルイに与えられました。

エレアノールの出した条件は、アキテーヌ公領の回復と、エレアノールが臣下としての義務を怠らないかぎり、再婚にルイが異議を唱えないことの、二つでした。

翌日、土曜日。エレアノールは、ルイとその重臣たちに別れを告げ、一路ボワチエに向かいました。

ボージャンシー宗教会議からは八週間後の、五月十八日、サン・ピエール大聖堂の鐘がたからかに鳴り響きました。元フランス王妃、エレアノールが、ノルマンディー公爵夫人、そしてアンジューとメーヌの伯爵夫人となったことを、世界中に告げる鐘の音でした。

この知らせに一番驚き、怒ったのは、ルイでした。エレアノールの変わり身のはやさにも仰天しましたが、エレ

アノールが、カペー王朝の不倶戴天の敵、アンジュー家のヘンリーを夫に選んだからでした。

アンジュー家は、アキテーヌ公家と縁無き間柄ではありませんでした。エレアノールの父ギヨーム十世は、一度ならずヘンリーの父ジョフロワと一戦を交えていますし、ジョフロワがノルマンディー進攻を企てたときは、ギヨームは、いちはやくジョフロワに味方し、ノルマンディーめざして進軍しています。ジョフロワは、気むずかしい父ギヨームの数少ない友人のひとりでした。

がっしりとして均整のとれた体格、美しい面立ち、激しい気性、冒険好きでありながら、根は實際家、文芸への造詣、祈る人よりは戦う騎士としての素質。アンジュー家とアキテーヌ家とは、さまざまなことで、よく似ていました。エレアノールは再婚の相手に、ルイとはまったく正反対の男性を選んだのです。

ヘンリーは、最近、叔父であるスコットランド王から騎士に叙せられたばかりで、騎士としての素質に磨きがかけられ、そのためか、落ち着きと自信にみちあふれていました。生まれたときから、イングリッド王になるべく帝王学をみっちりしこまれたせいも、すでに王の威厳すら備わっていました。美貌というてんでは、父にはるかにおよびませんでした。がっしりとした体格は、父よりひとまわりも大きく、生命力にみちあふれていました。肩幅が広く、厚みのある胸。聖地の最前線で戦う、テンプル騎士団や聖ヨハネ騎士団の騎士たちのように、太い腕。農夫のように大きく、ごつごつとした手。肩までたれた赤いまきげ。灰色の大きな目は、燃える二個の弾丸のようにらんらんと輝き、眼孔から、火の粉がとびだしているようでした。野性味と優雅な物腰と知的なきらめきとが、奇妙に混じりあい、不思議な魅力をかもしていました。

父ジョフロワは、ヘンリーがエレアノールにちかづくことをかたく禁じていました。主君フランス王の妃だから

であります、もつと特別の理由もありました。ジョフロワが王家の家令をつとめていたときに、王妃をその胸に抱いたことがあるからだというのでした。しかし、ヘンリーは父とは別のモラルをもっていたようです。王妃が父の愛人だったということはいざしらず、主君の妃にちかづくことがなぜわるいのか。現に、ルイの父、ルイ六世は、ルイの母ベルトを城砦に閉じこめ、アンジュー伯妃のベルトラードを奪って彼女と結ばれたではないか。エレアノールの祖父ギヨーム九世とダンジュルーズとの恋愛事件も、いまだに語りつがれていました。ヘンリーは、行動する若者でした。欲しいと思つたものは、なんでも手に入れました。それが、かれの冒険であり、生きがいでした。当時、若い騎士のあいだでは、主君の奥方に精神的愛（ときには肉体的な愛）を捧げ、奥方を主君から奪うかたちの姦通恋愛遊戯が流行していました。騎士が愛を捧げるのに、王妃ほどにふさわしい女性がいるでしょうか。恋敵として、一国の王とあらそうほどの冒険がこの世にあるでしょうか。ヘンリーには、ルイ六世やギヨーム九世とおなじ情熱の血が流れていたのです。

エレアノールとヘンリーは、出会つたその瞬間から、互いのなかに同じ熱い血がかよっているのを確認したはずで。ヘンリーとの出会いは、修道士のようなルイとすごした、寒々としてあじけない夜をいっぺんに埋めあわせしてくれるほどに情熱に満ちていたのでしょう。エレアノールは、ルイを捨て、ヘンリーを選びます。

ヘンリーとエレアノールとのあいだには、十一歳の年齢のひらきがあります。しかし、政略結婚に年の差は、たいた問題ではありません。げんに、ヘンリーの母マティルダ（イングランド王ヘンリー一世のひとり娘）は、父のジョフロワより十五歳も年うえでしたが、イングランドの王冠とノルマンディーの宗主権という莫大な財産をジョフロワにもたらししました。ヘンリーは、エレアノールと結婚する少しまえに、父の急死により、これらの所領の

相続人となっておりましたから、相続した土地に自らの領地アンジューを加え、さらに、エレアノールのアキテーヌを加えれば、ヨーロッパの大帝國が出現するはずでした。フランスの王冠を放棄したエレアノールにとつても、ヘンリーほど再婚の相手にふさわしい人はいなかったでしょう。それに、このときのエレアノールは三十歳でしたから、世継ぎを産む可能性は十分ありました。

年の差を除けば、二度目の結婚のほうが、はるかにエレアノールの理想に近いといえます。強く逞しく、未来ある高貴な夫を得て、エレアノールは、初めて結婚の幸せを味わいました。あまりに幸せだったので、神聖な気持ちさえし、いきとし生けるものにたいして、信じがたいようなやさしさを覚えたのでしょうか。よろこびをともにわかちあつてもらうために、エレアノールは、領地内のいくつかの修道院に、これまでになく大きな寄進をしています。結婚直後の五月二十六日には、モンティエルヌフをわざわざ訪れ、曾祖父の時代から修道院に与えられていた諸特権を拡大し、翌日、サン・マクシエンにゆき、ここでも、沢山の寄進をしています。寄進目録に、エレアノールはこう署名しています。

「エレアノール、神の御めぐみにより、アキテーヌ、およびノルマンディーの公妃となり、ノルマンディー公、アンジュー伯ヘンリーに婚姻によつて結ばれたる者」と。

この目録に、エレアノールはこうも書いています。「わたしがフランス王妃であつたとき、王は修道院にセーヴル・シイド森を寄進、わたしもそれに同意しました。それから、わたしは、教会の判断により、王のもとを去りました。そのとき、この森はふたたびわたしの所領となりました。ですが、賢きおん方々のおすめに従い、ペテロ大修道院長の懇願もあつて、最初るときはこころならずも同意したこの森を、いまは、心からのよろこびをもって

贈ります…いまや、わたしは結婚によってヘンリー、ノルマンディー公、アンジュー伯と結ばれました」

エレアノールは、フォントブロー大修道院には、特別多額の寄進をしました。この女子大修道院長は、ヘンリーの叔母のマティルダでした。エレアノールは、そのときの寄進目録につきのように、よろこびを記しています。

「血族結婚という理由により、夫ルイのもとを去り、まことに高貴なるわが夫ヘンリー、アンジュー伯爵に、結婚によって結びつけられていたい、神聖な靈感がわたしを導き、フォントブローの乙女たちの聖なる集いを訪れたいと願いをわたしに抱かしめました。神のお恵みにより、わたしは、この意図を理解できました。こうして、神のお導きにより、わたしはフォントブローにまいりました。姉妹たちが集まる館のしきいをまたぎ、ここに、深く感動して、わが父や祖先が、神とフォントブロー教会に与えたすべての特権をあらためて献納いたします。さらに、ポワトゥーの貨幣で五百スーの贈り物をさしあげます」

ヘンリーと結婚したエレアノールは、アンジュー家の根拠地アンジエに移り住みます。多くの高位聖職者や学者を生んだアンジエは、学究的で落ち着いた都でした。その都は、エレアノールの一行が移つてくると、いっぺんに華やかになりました。

ゆつたりと流れるマイエンヌ川の豊かな水面に、木々の緑が映え、こんもりとした森の緑に抱かれるようにして、修道院や教会が建っています。エロイーズを育てたロンスレイ修道院は、マイエンヌ川のむこうにあり、そのときも、知的で学問好きな乙女たちを育てていました。

ロワール川は、マイエンヌ川とアンジエで交差しており、四方に流れる川は、アンジエに水の都のおもむきを与えていました。文化的水準の高い都でありながら、いかめしい雰囲気は少しもなく、訪れる者の心をなごませてく

れます。自然の恵み豊かな田園の風情のせいでしょうか、「ひとたび、この町に入れば、我を忘れてしまうほどに美しい町」と、たたえられていました。

王の直轄下にあるフランスは、第二回十字軍失敗の痛手からまだ立直っておらず、田畑も人民も、うち続く飢饉や戦闘のために疲弊しきっていました。家宝はおろか、領地、爵位、官職、荘園までも売りはらって遠征軍に加わった諸侯の宮廷からは、詩人や芸人、芸術家、年代記作者、放浪の学僧や学者たちが、吐き出されていました。かれらは、パンを得ることができ才能を発揮できる場所を求め、さまよっていました。エレアノールの去ったカペー王朝の宮廷には、かれらを受け入れる力はもはやなかったのです。

エレアノールの宮廷だけが、ヨーロッパの文化の粋を集めて、天空の道しるべの星のごとく、燦然と輝いていました。放浪の学僧や詩人たちに、トゥルバドゥール、ギヨーム九世の血をひくエレアノールは、強い牽引力を持っていました。かれらは、野を越え山を越え、アンジエールにやってきました。

若く、美しく、富裕で自由を愛するアンジュー伯妃を、詩人たちは「西にいずる王朝の北極星」と、讃えました。エレアノールの宮廷は、ふたたび吟遊詩人や、小粋で軽薄な若い騎士たちでにぎわったのです。

ルイの宮廷で空しく過ぎた長い年月を、一挙にとりもどすかのように、エレアノールは、宮廷文化を花開かせることに情熱を傾けます。くすぶりつづけた文芸への熱い想いと才能は、奔流のようにエレアノールのなかからほとばしりできました。パリで培った学問への造詣と東方の都で吸収したヘレニズムとサラセン文化とが、南仏の詩歌の世界に融合され、独特の典雅で香り高い文化が築きあげられました。パリ、コンスタンティノープル、アンティオキア、シチリア、ローマと、キリスト教の最高位の帝都に滞在するあいだに、エレアノールは、天才的な能力で、

それぞれの文化の粋を吸収していったのです。それが、幸福な結婚を得て、一気に花開いたのです。祖父ギョーム九世をしのぐ宮廷文化が誕生しました。

エレアノールの宮廷に集まってきた多くのトゥルバドゥールのなかでも、ベルナル・ド・ヴァンタドゥールの名は、エレアノールの栄光とともに、後世にまで伝えられることになりました。ベルナルがエレアノールの宮廷にはじめて姿を見せたときのことを、吟遊詩人の年伝記作者レイノアルは、つぎのように記しています。

「彼（ベルナル）はリムーザンを去り、ノルマンディー公妃のもとにやってきました。公妃は若く、大変に力のあるお方で、勇気と名譽を理解され、そういつたことを讃える歌を望まれた。公妃は、ベルナルの歌を気にいられた。ベルナルを、真心をこめて歓迎された。ベルナルは、長いあいだ、公妃の宮廷にとどまり、公妃に思慕を抱き、公妃を讃える歌を多く作った。公妃も彼を愛された」

エレアノールの宮廷にきてからも、ヴァンタドールは数々の傑作を作りました。なかでも、オック語抒情詩の「雲雀が羽ばたくのを見るとき」は、ポワトゥーの調べとして、名声をかちえました。

陽の光を浴びて 雲雀がひばり

喜びのために羽ばたき舞い上がり

やがて心に拡がる甘美の感覚に

われを忘れて落ちる姿を見るとき

ああ、どれほど羨ましく思えることか、

恋の喜びに耽る人々の姿が。

その一瞬に、この胸が欲望のために
破れなければ不思議なくらいだ。

ああ、恋に詳しい自分だと思っていたのに
何と知らぬことが多かったことか！

愛して甲斐のないひとを

なお愛さずにはいられないのだから。

あのひとは私の心を、私自身を、全世界を

取り上げてしまい、私から逃れ去る、

こうしてすべてを取りあげたあと

欲望と羨望に燃えた心だけを残して。

(新倉俊一訳)

森羅万象の移りやすさ、はかなさをしずかに哀しむ彼の詩は、聴衆から感動の涙をさそいました。

ベルナルもまた、同時代のトゥルバドゥールと同じように、情熱の賛歌を意中の貴婦人に捧げています。「磁気をおびた人」、「力づけ」、「みるだに美しいひと」などと題した愛の詩を作りました。この詩を捧げられた貴婦人

の名は明らかにされていません。意中の貴婦人の名は、詩人の心の宝として心中深く秘めておくのが習わしだったからです。しかし、ベルナルにとり、いや、当時の多くのトゥルバドゥールにとり、エレアノールが「磁気をおびたひと」であつたことは、たしかです。ベルナルは、エレアノールに「高貴にして、やさしく」、「誠実にして真摯」、「いかなる王にも王冠の輝きをそえる女性」、「典雅にして美しく、魅力そのもの」と、惜しみない賛辞を捧げています。

エレアノールの宮廷にみちみちていたのは、愛の詩ばかりではありませんでした。アーサー王ロマンスを伝えるブリタニアの物語作家、放浪詩人、ノルマンやアンジューの年代記作家、学僧、それに巡礼路をはずれた巡礼たちまでもが、宮廷を訪れております。

文芸の女王として南フランスに君臨し、詩人たちと愛の戯れに身をゆだねているエレアノールからは、まばゆいばかりの輝きがあふれ出ていました。エレアノールにとっては、まさに黄金の日々でした。その真つ盛り的时候に、エレアノールは、玉のような男の子を産みおとします。一一五三年、八月一七日のことでした。

フランス王妃だったときは、あれほど望んでも得られなかった男の子が、ヘンリーと結婚して一年足らずで、恵まれたのです。エレアノールは、この男の子をギヨームと名づけます。アキテーヌ公爵家の長子に、代々与えられてきた名でした。そして、早々に、ギヨームをポワトゥー伯領の正式の相続者としました。「アキテーヌの女主人」であることを、片時も忘れたことのないエレアノールでした。

王子ギヨームの誕生は、日の出の勢いのアンジュー家にさらに勢いをつけることになりました。占星家たちは、こぞつて、ギヨームの誕生を、星の運行がすべて、アンジュー家の味方をしていることの表れとみなしました。

長子ギヨームは、わずか三歳にして、一一五六年病死しますが、同じ年の六月、幼い命を引き継ぐかのように、長女マティルダがロンドンで誕生します。プランタジネット王朝の花嫁は、この後も精力的に子どもを産み続け、後継者作りに貢献します。一一五七年、九月八日、のちに獅子心王と呼ばれるようになるリチャードをオックスフォードの宮殿で産み、一一五八年、九月二三日、四男ジョフロワを、一一六一年、九月に二女エレアノールを、一一六五年、十月にジョアナをアンジェールで、一一六六年二月二七日には、ふたたびオックスフォードで、末子のちに欠地王と呼ばれるようになるジョンを産みました。

ハンマーと鉄床

結婚してから十年あまりのヘンリーとエレアノールを、ひとつの目標に向かって作動するハンマーと鉄床にたえた歴史家がいます。ヘンリーとエレアノールの野望は完全に一致していました。二人の夢は、征服と遺産相続によって得た所領を土台にヨーロッパの王国を築くことでした。諸侯の持つ自世的な権力を、王権の配下に置き、一大中央集権国家を築きあげることでした。そのためには、王権を国のすみずみにまで浸透させ、軍事力を王のものに集中させ、強力な国家をつくらなければなりません。それを可能ならしめる二大車輪が、ヘンリーとエレアノールだったのです。ヘンリーは、エレアノールの力を必要としていました。支配欲は、エレアノールの天性でした。ヘンリーとともにイングランドを統治するという立場は、長いあいだ眠っていた彼女の政治的才覚をめざめさせました。

イングランドの王位についたヘンリーとエレアノールに、当初課せられた仕事は、先の王ステイーヴン時代の無政府状態に終止符を打ち、国家に秩序と平安をもたらすことでした。奪われたノルマン王家の権利や特権も、取り戻さなければならず、このような実務的な仕事にたいしては、ヘンリーは天才的能力を発揮しました。エレアノールもまた、領内に秩序を回復し、法の正義を施行するために、势力的に動き回りました。そして、クリスマスと復活祭には、ウインチェスター、ワリングフォード、ノッティンガム、オックスフォード、リンカン、マルボローなどでヘンリーに合流しました。ヘンリーお気に入りの森の宮殿や、クラレンドンやウッドストック、ブリルやピールクロの森で大好きな狩りを楽しむ王のそばにも、エレアノールの姿がありました。エレアノールの存在は、プラントジネット王朝の勝利と栄光を象徴していました。

ヘンリーとエレアノールにとり、一一五五年から、一一六五年にかけての十年間は、ひたすら権力を強め、領土を拡張する、まさに前進と繁栄の時期でした。ヨーロッパの西の地図は書き換えられ、力の均衡の変化は、ひとびとの運命を変えました。ハンマーと鉄床でつくりあげられた、プラントジネット王朝の勢いは、とどまるところを知りませんでした。ふたりの乗り込んだ無敵艦隊は、世界の敵をむこうにまわしてもびくともしませんでした。だが、上昇したものは、かならず下降する。ひとも王国も、無限のかなたに飛翔することはできない。それが、自然のことわりというものでしょう。そして、運命の車輪の下降は、自らの車輪の腐食とともに始まるものです。ヘンリーとエレアノールとて、この自然のことわりから無縁ではられませんでした。

麗しきロザムンド

ジョンが生まれるとまもなく、ヘンリーとエレアノールは、別居生活に入ります。

ヘンリーには、幾人かの寵姫がいました。だいたい、いつも戯れ程度で終わっていました。だが、ロザムンドだけは、これまでと違っていました。ヘンリーは、ロザムンドを真剣に愛していたのです。

一一六六年のクリスマス、エレアノールは臨月のお腹をかかえて、英仏海峡を渡り、ロンドンに着くと、ウッドストックの別荘に急ぎました。噂どおり、ヘンリーの新しい恋人は、王妃のようにして暮らしていました。王妃の権限を用いて、ロザムンドをウッドストックから追い出すこともできましたが、国王の愛人を追い出すことにためらいをおぼえ、そのかわり、愛人とおなじところにすむことは拒絶して、エレアノールはこどもたちと伴の者たちを連れて、オックスフォードちかくのボーモント城に移り、この城で、その年もおわりちかく、十二月二十七日、ジョンを産みました。

世界の薔薇と騒がれた若き日の美しさを、エレアノールはいまだに失わずにいました。王妃としての年月は、その美しさに気品をそえていました。だが、九人のこどもを生みあげ、四十の坂を越えたエレアノールです。容色のおとろえは、おおうべくもありません。彼女とて、自然の時の歩みから無縁でいられるわけがなかったのですから。

ロザムンドは、ヘンリー好みの、色白でほっそりとした美しい少女でした。最初の出会いからロザムンドの死まで、十二年あまり、ヘンリーは、「王侯貴族がけっして抱くことのできないようなすばらしい被造物」と歌われたロザムンドをけっして離しませんでした。

ロザムンドの死後、彼女の死因をめぐってさまざまな憶測が流れ、まことしやかに伝えられていきました。

一説によりますと、ヘンリーがイングランドを離れているあいだに、エレアノールが迷路の謎を解き、隠れ家へ侵入して彼女を殺したといわれています。ヘンリーがロザムンドに与えた刺しゅう用の絹糸が針箱からもれ、交替のために退出した騎士にからまる絹糸のはしを、エレアノールが見つke、逆にそれをたぐってゆき、彼女の部屋をつきとめた。ロザムンドの部屋にはいると、エレアノールは、彼女に迫ったということです。毒を飲んで死ぬか短剣でのどを突いて死ぬかと。美しいとおなじくらい勇気あるロザムンドは、毒による死をえらんだということです。また、べつの言い伝えによると、王妃はロザムンドを裸にして、火ぜめにし、それから胸に二匹のひきがえるをのせたところ、ひきがえるは、ロザムンドの生き血を吸い、ロザムンドの血がたらりと流れるたびに、王妃はけたたましい笑いをあげたということです。

このような言い伝えからは、嫉妬に狂う壮絶な王妃の姿が浮かびあがってきます。おそらくのちに、王妃と熾烈な戦いに入ったヘンリーの側が、流したものでしょう。

若く美しい夫の愛人に、嫉妬をおぼえたのは、たしかでしょう。それに、ヘンリーがウエールズに遠征し、ロザムンドに出会ったところ、エレアノールは、アンジエで、ブレトン人とポワチエ人の反乱鎮圧に苦慮していました。このようなときに、夫が若い女性と戯れていたのですから、エレアノールが、夫の行状をこころよく思うはずはありません。だが、エレアノールはロザムンドに手だしはしなかったと思います。それに、手だしをするまえに、エレアノールは、こどもたちを父に背かせたという理由で夫に軟禁されていましたから、物理的に不可能でした。

ヘンリーは、エレアノールの侍女や女官にかたはしから手をつけました。ヘンリーが臣下の屋敷や所領に足を踏

みいれるや、奥方や娘たちは、私室にとじこめられ、王のまえに姿をあらわすことを禁じられました。美しい女性を見ると、わがものにしないでおれない性質だったのです。ヘンリーの庶子二人を受け入れ、宮殿で育てたと同じように、ヘンリーの女性問題も、結婚の当初から日常生活の一部でした。それに、エレアノールはトゥルバドゥール、ギヨーム九世の孫娘です。不義や姦通をたからかに歌いあげた恋愛詩のなかで育ちました。エレアノールの祖母ダンジュルーズは、当時最も名を馳せた姦婦のひとりでした。エレアノールが、夫の愛人の存在を知ったとて、彼女を毒殺するほど、とりみだすわけがなかったでしょう。エレアノールは、ヘンリーがベケット（のちのカンタベリー大司教）に夢中になり、一転して異常な憎しみを抱きはじめたときのように、ロザムンドの一件にしても、むしろひややかにながめていました。ただ、麗しきロザムンドの登場が、ヘンリーとの別れを早めたことは確かでした。

ヘンリーと結婚してから、第七子誕生まで、エレアノールは、毎年のように子どもを産み続けました。フランスに残してきた二人の娘を入れると、九人の子どもを産んだことになります。人一倍健康な彼女は、出産によって体力を消耗するということがありませんでした。一人産むごとに、生きる活力を新たに得て、健康になっていききました。多くの子の母親であることは、なににもかえがたい人生の幸せでした。出産と育児は、彼女に大きなよろこびを与えました。

だが、出産と育児が彼女の人生の目的になったことは一度もありません。エレアノールが最も欲したこと、それは、国と人とを支配することでした。彼女にとって、王妃になることは、王の共同統治者になることを意味したのです。だから、エレアノールは、王冠を欲したのです。フランスの王妃だったときも、イングランドの王妃になっ

てからも、一度として儀礼的、象徴的役割に満足したことはありませんでした。ヘンリーは、当初、混乱時のイングランドを平定し大陸の所領を統一するのに、エレアノールの力を必要としていました。だが、アンジュー帝国が一応の形をととのえ、政治にたち入る王妃の存在をうるさく思うようになったようです。しよせん、一つの国に、二つの王冠はいらない。母マティルダのように、こどもを産み育て、王国の土台を築いたあとは、表舞台からしりぞき、尼僧院でしずかな余生をおくればいいのだと。

ヘンリーは、しだいに、王妃を玉座からおぎけるようになってゆきます。そして、ついに、彼女がこよなく愛したウッドストックに田舎娘ロザムンドを囲い、エレアノールを侮辱しました。たいていの王妃なら、変わってしまつた状況を受けいれ、静かに尼僧院にひきこもるでありましょう。しかし、このような運命は、エレアノールの望むところではありませんでした。彼女には、まだまだ表舞台で活躍するだけの体力と気力があつた。それに、うけた辱めに対抗するだけの財力も精神力もありました。

フランスの王冠を捨てたとき、アキテーヌの領主としての地位が彼女を待っていました。どのようなときにも、彼女には、アキテーヌという帰るべき故郷がありました。

イングランド王が、アキテーヌ出身の王妃を辱めたとき、アキテーヌのひとびととエレアノールの利害は一致します。外国人の王に支配される屈辱をしのんできたアキテーヌ人たちは、いまこそ不当な王に対して立ちあがるときだと感じます。そして、エレアノールのなかで、ひとつ夢が、しだいにふくらみ、形をととのえてゆきました。

エレアノールは、ジョンを生んだ年の十二月、ノルマンディーへむけて出帆しました。エレアノールの身のまわりの品や家財道具をのせた船は、七隻にもなりました。ヘンリーが生きているかぎり、二度とイングランドの土を

踏まないとの王妃の決意が、この大移動にはあらわれていました。エレアノールが去ってから、ヘンリーは思い知るでしょう、ハンマーには鉄床が必要であり、車は片輪だけでは動かぬことを。

アーガントンでひらかれた一一六七年のクリスマス宮廷のあと、エレアノールは、しばらく自分の所領に落ち着きたいとの希望をヘンリーに述べ、ポワチエにむかいました。自分の道をゆくための、静かな別離でした。

エレアノールは四十四歳になっていました。当時の平均寿命はとうに越していました。女は三十になると老年とみなされていた時代です。世界の薔薇と讃えられてひとびとを魅了したところのおもかげをいまだに残し、美しさを保ってはいましたが、時は彼女にも、その腐食の魔の手をのばしていた。アンジュー家の若き獅子ヘンリーを誘惑したころの、成熟した女性の魔力は失われていました。ヘンリーは、女としてのエレアノールも、共同統治者としてのエレアノールも必要としてはいない。王妃の威厳は傷つけられていました。それなのに、彼のもとにとどまつて、いかなる意味がありましょう。夫と別れて、我が道をゆかなければならない。わが道とは、おのれの力で人々を領土と、そして、国を動かすことです。

ヘンリーとベケットとの確執から、エレアノールは学んでいました。ヘンリーのもとをたち去るときには、ことを構えてはならないことを。胸にしっかりと抱いている、ある計画を実現させるためには、静かにたち去らねばならない。さもないと、自滅する。ベケットが招いたはねかえり（ヘンリーは四人の刺客にベケットを暗殺させた）は、避けねばならないのでした。

表向きは、アキテーヌ領内の不穏な動きを抑えるということで、ポワチエへ帰る許可をヘンリーからとりつけました。じじつ、ヘンリーの支配を快く思わないアキテーヌの貴族たちは、たえまなく、反乱を企て、ヘンリーを悩

ましつづけていました。ヘンリーよりは、エレアノールのほうが、かれらを手なずける術を心得ています。しかし、ポワチエに帰還するにあたって、領土内の貴族や民に、エレアノールが王と別れて、帰ってくるのだという印象を少しでも与えてはなりませんでした。エレアノールは、ヘンリーがみずから護衛隊を指揮して、彼女をポワチエまでおくりとどけるよう仕向けました。ポワチエへ向かうエレアノールの心からは、かつての同志、ヘンリーの存在はあとかたもなく消えていました。かつてヘンリーとエレアノールは、同じ目的へむかって作動するハンマーと鉄床にたとえられました。ふたりは、力をあわせて、みごとアンジュー大帝国をつくりあげました。だが、これからは、この帝国を、みずからの手で壊さなければならないのです。息子たちのために。そう、自分には、野望を託すことのできるすばらしい子どもたちがいる。こどもたちの母として生きてゆく道がある。巷のひとびとの期待をうらぎり、エレアノールは、ロザムンドを毒殺などしませんでした。女への復讐など、エレアノールの考えのおよぶところではないのです。わたしは王妃、復讐は政治で返す。自分の所領内から、政治を自分の手で動かしてみせる。その政策が、いかにヘンリーの政策に敵対するかは、きっと歴史が証明してくれる。

エレアノールは、大陸の自分の所領をアンジュー王家から切り離し、こどもたちに与えることを考えていました。そのためには、こどもたちに、フランス王にたいし、臣従の礼をとらせなければならず、また、アキテーヌの女公として、王妃自身、ルイに臣従の礼をとる立場にありました。イングランドの王位は、ヘンリー王子が継ぐであろう。だが、ポワチエは、歴代のアキテーヌ公家の当主に生き写しのリチャード王子に継がせたい。

イングランド王妃、エレアノールが、ポワチエで実権をふるうようになると、ルイとヘンリーの立場は微妙に変化してきます。

ヘンリーとエレアノールが別居生活に入ったらしいとの噂は、ルイの耳にも届きます。無視することのできない問題でした。エレアノールがイングランドから身をひきたいまは、ルイにとって、アンジュー帝国の根元をゆるがす絶好の機会でした。

エレアノールの意向を確認したルイは、積極的に動きはじめます。まず、ルイはヘンリーに、大陸の所領を三人の息子に分けるようにと提案しました。そして、大陸の領土にたいし、息子たちに、臣従の礼をとらせるようにと言いました。この条件をのむなら、ヘンリーが喉から手が出るほど欲しがっているヴィクセンから手を引いてもよいと言いました。さらに、ルイは、二番目の妻とのあいだにできた九歳のアデレイド姫をベリー伯領とともにリチャード王子にやつてもよいという条件まで出します。ちょうど自分の目の黒いうちにヘンリー王子に王位を継がせ、また大陸の所領を三人の息子たちに確保したいと願っていたヘンリーは、この提案にとびつきます。ヘンリーに有利にみえながら、この提案は、じつは、父と子のあいだにくさびを入れて父子の結束をくずす意図を秘めていました。ヘンリーはそれが見抜けませんでした。彼は、直裁的で、物事の裏をみぬけない男でした。

ヘンリーは、分割は形式上のことで、実権は自分にあるものと考えていました。このときのヘンリーは、まだ三十五歳の男盛りでした。羽も生えそろっていない息子たちに実権を渡すことなど、はじめからヘンリーの念頭にはなかったのです。だが、ここに、ヘンリーの誤算がありました。息子たちの背後にいるエレアノールの存在に気づいていなかったのです。形式の上とはいえ、三人の王子たちはそれぞれ領土を与えられ、それにたいしフランス王に臣従の誓いをしました。このことは、事実です。とすれば、王子たちの所領の宗主権は、父のヘンリーではなく、ルイにあります。ルイは計算していましたが、形式を盾に、エレアノールが、息子たちにかわって、ヘンリーに

実権の譲渡を要求するであろうと。

ヘンリーと結婚してから十五年ほどのあいだは、ふたりのあいだには、ロマンスの主人公たちのように、情熱とよべるものがありました。そして、ふたりで手を取りあって、アンジュー帝国建設という法外な武勇の冒険に挑戦しました。しかし、ヘンリーは、エレアノールとの創造的でダイナミックな二人三脚を、とちゅうで放棄してしまいます。ヘンリーは創造より情欲を選んだからです。そして、ロザムンドという田舎娘を、自分のしとねにひきずりこみました。このとき、ヘンリーとの愛の宮廷は終わったのです。愛が去ったあとに、武勇だけが残りました。ヘンリーと別れたのち、エレアノールはただひとり、「白い雄鹿」を求めて、冒険の旅に出たのでした。エレアノールの一人旅は、プランタジネット王朝から大陸の所領を引き離し、フランス王国に返還するという結果を招きます。この結果にエレアノールは悲しまなかつたと、わたしは思います。エレアノールがピレネーの向こうから連れてきた孫娘のエレアノール姫が、前夫ルイの孫息子、フランス皇太子の花嫁となり、のちには、エレアノールが脱いだフランスの王冠を戴くことになるのですから。こうして、半世紀前にルイにたいして犯した罪の償いをするこ
とができるのですから。

石井美樹子著『王妃エレアノール―十二世紀ルネッサンスの華』は、一九九四年朝日新聞社からペーパーバックが再出版されました。